

「西アジア発掘調査報告会」の20周年

第20回西アジア発掘調査報告会実行委員長 石田 恵子

Annual Meeting of Excavations in West Asia: 20th Anniversary

Keiko ISHIDA

当学会主催の第20回「西アジア発掘調査報告会」が2013年3月23・24日にサンシャインシティ文化会館会議室にて開催されました。23日午後、第1回の演者のうち、松本健「西アジア発掘調査報告会（第1回）の開催趣旨」、赤澤威「私のシリア調査の歩み」、脇田重雄「シリアの発掘と古代オリエン特博物館」、藤井秀夫「国士舘大学のイラク調査」、金関恕「イスラエル発掘調査を顧みて」、泉拓良「パルミラからティールへ」の方々にお越し、20周年記念講演を予定していましたが、残念ながら、講演を楽しみにしておられた藤井先生の急逝により講演は一つ減ることになりました。しかし、昔と変わらぬお元気で皆さんご講演いただき、聴く我々もエネルギーをいただきました。また、赤澤先生の講演にユースフ・カンジョウ氏（シリア・アラブ共和国アレppo博物館館長）の講演が加わり、シリアの厳しい現状の報告を受けました。話には聞いていましたが、映像を見て一同衝撃を受けました。

「西アジア発掘調査報告会」は第4・5・6回と第10回以降今回まで、古代オリエン特博物館が共催となり、サンシャインシティ文化会館7階会議室で開催してきています。振り返れば「西アジア発掘調査報告会」はそもそも国士舘大学の松本健氏により始められた会で、国士舘大学で開催されていました。いま継続できているのは、毎年参加される方々の熱意、日本西アジア考古学会のネットワークと労力及び資金、そしてサンシャインシティを含む古代オリエン特博物館の会場協力の賜です。なお、残念ながら第18回報告会は2011年3月の東日本大震災により開催は叶いませんでしたが、報告集は存在します。

「西アジア発掘調査報告会」開催の経緯については、松本健氏の当日のご講演を掲載させていただき、説明に代えたいと思います。今後も、西アジアの政情の安定と「西アジア発掘調査報告会」の存続を祈念いたします。

石田 恵子
古代オリエン特博物館

Keiko ISHIDA

Ancient Orient Museum, Tokyo

国士舘大学イラク古代文化研究所 松本 健

「西アジア発掘報告会（第1回）開催趣旨とその後」についてお話をしたいと思います。我が国における西アジア考古学というものは1956年に東京大学江上波夫先生を中心としたイラク・イラン調査団に始まり、1960年代の終わりから1970年代の始めにかけて、新たに1964年日本オリエン特学会からイスラエルに考古学調査団が派遣され、1990年からエン・ゲヴ遺跡の調査開始、そしてイラクでは、1970年国士舘大学がイラク西南砂漠遺跡調査を開始、シリアでは1974年には江上波夫先生及び東京教育大学のシリアのタブカ・ダムの水没地区遺跡調査の開始、1985年には財団法人中近東文化センターによるトルコ、カマン・カレホユックの発掘調査開始、1990年からは奈良シルクロード研究財団によるパルミラ調査の開始、1990年筑波大学によるシリアのエル・ルージュの発掘調査開始などがあげられますが、この他、早稲田大学のエジプト、京都大学の



松本健先生



赤澤威先生とユースフ・カンジョウ先生



脇田重雄先生



金関恕先生



泉拓良先生

パキスタン、東京大学、広島大学のイランなど多くの調査団が西アジアに派遣されました。

そうして、1990年前後には西アジアでの考古学調査は10隊以上が毎年行なうようになっていったのです。そうした中、各調査団は多くの成果を挙げ、欧米の外国調査団とも交流が行われるようになりました。しかし国内での各調査団の交流、各大学や、研究機関の交流は依然として少なく、昔ながらの縦割りの世界でした。多くの資料や情報、経験が広く知られていないという現実には研究者や学生にとっても大変残念な事であり、情報公開の要望が高まっていました。

そこで文部省科研費総合研究(A)の「西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究」平成5年～7年(1993～95年)を、松本が研究代表者として申請しました。そのメンバーは当時の最前線でご活躍の方々でした。国土館大学のイラク古代文化研究所の藤井秀夫、大沼克彦、岡田保良、小口和美、矢島鎗司(国土館大学情報センター教授)、松谷敏雄(東京大学東洋文化研究所教授)、赤澤威(東京大学大学総合研究資料館教授)、西秋良宏(東海大学文学部講師)、江上波夫(古代オリエント博物館館長)、脇田重雄(古代オリエント博物館研究課長)、岩崎卓也(東京家政学院大学人文学部教授)、常木晃(筑波大学歴史・人類学系助教授)泉拓良(奈良大学文学部教授)、金関恕(天理大学文学部教授)、大村幸弘(中近東文化センター主任研究員)、小西正捷(立教大学文学部教授)、後藤健(東京国立博物館学芸部東洋課室長)、佐々木達夫(金沢大学文学部教授)、石田英実(京都大学理学部教授)、川越哲志(広島大学文学部教授)の方々です。

この研究が採択されて、西アジア史研究のデータベース化のための、考古学的な資料、すなわち遺跡、遺物、遺構、文献、映像記録などの記載項目を設定し、データベース化に着手いたしました。そして各調査を先史時代、青銅器時代、鉄器時代、ヘレニズム～初期イスラーム時代などに区分して、具体的にデータベース化していきました。そ

して同時に、当時行われていた発掘調査成果の報告会・研究会を開き、一般公開を推進し、それもまたデータ化していくことを始めたのです。この西アジア発掘調査報告会(第1回)はまずイラク古代文化研究所のある国土館大学鶴川校舎で行われました。そしてそれは今日講演される方々を中心に始まったのです。江上波夫「西アジアの発掘調査の期待」、赤澤威「シリア、デデリエ洞窟調査」、松谷敏雄・西秋良宏「カシュカシヨクの発掘調査」、脇田重雄「テル・マストゥーマの発掘調査」、大村幸弘「アナトリアのカマン・カレホユックの発掘調査」、佐々木達夫「湾岸のジュルファル遺跡の発掘調査」、後藤健「アイン・ウンム・スジュール遺跡の発掘調査」、泉拓良「シリア、パルミラの発掘」。西アジア各国の調査動向：イラク調査(藤井秀夫)、イスラエル調査(金関恕)、シリア調査(岩崎卓也)の先生方の発表が行われました。

第2回の平成6年(1994年)には、第1回の遺跡発掘報告に加え、宇宙考古学の坂田俊文、エジプトのアコリスの発掘調査の川西宏幸、トルコのゲミレル島の調査の辻成史の諸先生方が加わりました。

第3回の1995年の発掘調査報告会には第2回の調査報告に加え、エジプト調査の吉村作治、シリアのアイン・ダーラ神殿の保存修復の西浦忠輝、パキスタンのガンダーラの調査の小泉恵英ら諸先生に発表していただきました。会を増すごとに発表者が増えて1日開催では時間が足りないほどの盛況となりました。

そして、このような発掘調査報告会やシンポジウム、研究会の成果を公開そして出版すると同時に、最終的に「日本人による西アジア研究の著作目録と調査遺跡データベース」及び「海外の著名な西アジア史研究の雑誌目録のデータベース」を作成しました。こうして「西アジア史研究のデータベース化に関する総合的研究」は3年間で終了しました。しかしながら、今後一層のデータベース化は必要不可欠です。

こうしてようやく西アジア史研究の情報公開、また情報

交換、研究者間の交流が盛んとなってきて、このまま止めてしまうのはもったいない、何とか発掘調査報告会や研究会を続けていこうという要望が高まって参りまして、この報告会の継続を軸に日本西アジア考古学会を設立することになったのです。もちろんこれには皆様のご支援、ご協力、そして研究者の積極的な設立への熱意があったからであります。

ただ、近年の中東情勢や国内の経済状況を観ますと、

我々西アジアを研究対象地域にしている者にとっては、今後厳しい研究環境が続くものと思われまます。それだけにこの西アジア発掘調査報告会は発掘報告や優れた研究をも含めて、もっと多くの人に西アジア史研究を紹介し、理解を広めていく必要があると考えます。私も微力ですが、協力していこうと思っています。今後とも皆様のご協力、ご支援の程、よろしくおねがい致します。

(2013年3月23日)